令和６年度第１回地方独立行政法人京都市立病院機構理事会　議事録（要旨）

○　日　時：　令和６年４月３０日（火）　午前１０時３０分から１２時まで

○　場　所：　市立病院北館７階ホール１

○　出席者：　理事長　　黒田　啓史

理　事　　清水　恒広、岡野　創造、半場　江利子、長谷川　一樹、
能見　伸八郎、山本　みどり、白須　正、小畑　英明、

監　事　　長谷川　佐喜男、中島　俊則

事務局　　谷利経営企画局次長、大島京北病院事務管理者・統括事務長、川本経営企画課長

１　開会

２　報告事項

⑴　地方独立行政法人京都市立病院機構の組織改正について

資料２に基づき、事務局から報告。

⑵　月次収支（２月まで）報告

資料３に基づき、事務局から報告。

○　赤字の主な要因は、コロナ補助金収入が減少した影響ということか。

→　その通りである。

○　前回の理事会において、令和５年度経常損失の見込みは 980 百万円と報告があった。しかし、２月までの経常損失が 1,540 百万円ということは見込みが変わるということか。

→　経常損失 1,540 百万円には、コロナ補助金収入のおよそ 500 百万円が含まれてない。ただ、３月月次収支においても赤字が見込まれるため、令和５年度経常損失は更に増加することが予想される。

→　３月は１億円の赤字が見込まれる。令和５年度経常損失はコロナ補助金収入を含めて今のところ、およそ１２億円の見込みである。

○　経常損失の増加については、患者数が減少していることが要因か。

→　入院患者数は昨年度より増加しているが、平均在院日数が短縮したことも収支悪化の要因である。

→　入院患者数は増加傾向であるが、材料費が高騰している。中でも、医薬品の支出額が増加したことも要因である。

→　高額医薬品の使用頻度が増加したことが支出の増加に繋がっている。薬価差益もほとんどなく、高額医薬品の使用は見かけ上、売上高は上がるが利益を得ることが難しい。良い医療を提供するほど薬代がかかり、利益が出にくい。薬の消費税の支払を考慮すると赤字になりかねない。また、ロボット支援手術により、平均在院日数は短縮されたが、新たに入院患者を獲得できなかったため病床稼働率が低くなったことも要因である。

○　薬品費、診療材料費、委託料が増加している中、患者数増加を図るだけでは支出を抑えるのは難しい。診療報酬改定も病院経営にとって厳しい傾向が続く中、今までとは違う戦略でプラスになる要素を見つけていかなければならない。

→　今回の診療報酬改定は、プラス改定ではあるが、職員の給与の引上げへの充当分がほとんどであ

るため、経営面ではマイナス改定と言える厳しい状況。そのような中、令和５年度の決算見込も大きな赤字だが、今後、収支均衡にしていくための対策をみんなで頑張って考えていく必要がある。

○　今後、令和元年度の目標数値に近づけていくことが大切である。病床稼働率の向上、入院患者数増加を図るとともに地域医療機関から患者を紹介していただけるような地域連携業務の強化をしていく必要がある。
→　紹介などの前方連携の成果は出ているので時間外、休日の紹介の断り件数を減らし、断る場合は紹介元に納得していただけるように説明をしていく必要がある。

○　患者から口コミなどで、良い評判がいただけるような努力、外来患者のアフターケアーが大切である。また、京北病院の収益的収支において報償費が減少しているがこの経費は何か。
→　報償費は応援で入ってもらう医師の謝礼である。

○　時間外の紹介受入が難しいのは分かるが、開業医が診察している時間までは時間外の対応が出来るように体制を整えていくべきである。京都市にも当院の状況について随時報告するべきではないか。また、年度計画において様々な取組を立てているが、全てに対応することは難しいため、重点項目を決めて絞った取組をすべきと思う。

○　昨年度より病床稼働率及び売上は増加しているのに、赤字が増加している要因について教えてほしい。
→　薬品費及び診療材料費の高騰、利益が出にくい高額医薬品の使用頻度の増加、固定費が年々上がっているのが主な要因である。

○　病床稼働率 90％を目指すと黒字計上になるのか。
→　黒字計上を目指すためには、理論上、病床稼働率 97％を目指す必要がある。ただ、新型コロナ患者がなくなったわけではないので、病床管理上、現実は厳しい状況である。

○　前に小畑理事からお話しのあった部門別収支から赤字分野の対策を立てることも検討されてはどうか。
→　部門別収支については、民間病院では積極的なところもあるのは承知している。当院は、公立病院で政策医療に取り組んでいるため、採算を図るのは難しい面もある。総合病院として、今後、どのように経営をしていくかは考える時期にきている。

○　薬品費や診療材料費が高騰していること、直近の収支が赤字を見込んでいることから令和６年度も赤字傾向の改善が難しいと考えられるが計画上、黒字の計画になっている。計画の内容を全て達成することは不可能に思う。現実的な計画を立て、京都市に図るべきではないか。赤字構造の中、取り組むべきことを明確化していく必要がある。
→　現在の経営状況については危機感を感じている。今後、令和７年度、令和８年度に施設に対する投資の考え方、収益向上に向けて早急に検討していく必要があると考えている。また、京都市とも連携し、対策を立ててまいりたい。

○　患者数増加を図る必要がある中、時間外の受入ができていないことは問題である。今後、病病連携を図るために地域医療機関の地域連携室職員との関係を構築していくべきである。
→　地域連携業務に取り組んではいるが、今後、継続的に努力していく必要がある。

○　ダヴィンチ SP は稼働状況について教えてほしい。

→　泌尿器科を中心にダヴィンチ SP による手術を開始し、外科についても手術を実施している。今年度、ダヴィンチ Xi と 2 台体制で 400 症例を目指す。

○　人口減少の中、患者数増加を図ることは難しい市場構造になっている。患者は増えない前提で考えるのが健全な計画ではないか。

→　市内には京大などの大規模病院も多く、生き残りを真剣に考えていかない状況になってきているが、まずは今できることである紹介の断り件数を減らすことや救急患者の受入促進に力を入れていく。

→　医療に係るマーケットが縮小する中、公立病院として選択と集中のあり方を考えていく必要がある。近年、平均在院日数が短縮している要因として、当院の提供する医療が優れているために早期に退院可能となっていることが考えられる。当院は、地域連携や医療安全など様々な取組みを実施しているが、良い医療の中身、取組内容を外部の皆様に上手く伝えられていないと思う。今後、当院がどのようなことに取り組んでいるのかを伝えていきたい。

→　当院は、市民のために政策医療に取組んできた。その中で、感染管理分野は利益を得ることが難しいことを、京都市に説明していきたい。

→　京都市民に良い病院として評価していただけるように努力していく。今後、稼働率向上、紹介患者及び救急患者の受入促進に力を入れていきたい。

３　その他

なし

４　閉会